活動動詞の意味構造

影　山　太　郎

1．語彙的アスペクトと意味構造

Vendler（1967）の研究は動詞を語彙的アスペクトによって分類したものとしてよく知られている。

(1)　Vendler の動詞4分類

A．状態（states）：see, know, believe, have, resemble

B．到達（achievements）：recognize, find, lose, reach, die

C．活動（activities）：run, swim, push a cart, drive a car

D．達成（accomplishments）：paint a picture, make a chair, push a cart to the supermarket, run a mile

しかしこれは結局のところ，単なる分類に終わっていて，動詞の意味そのものを解明するには至っていない。Vendler の洞察を意味構造の違いとして分析したのが Dowty（1979）であり，その発展は Foley & Van Valin (1984), Van Valin (1990) に見られる。これらの成果を踏まえた上で，筆者は最近の一連の研究（影山1993a, b, 1994a, b, c, 1995）において様々な動詞の概念的意味が次のような語彙概念構造（Lexical Conceptual Structure）のスキーマに還元できることを論じてきた。

(2)　a．静止位置・状態：y BE AT z

b．状態・位置変化：BECOME [y BE AT z]

I gratefully acknowledge the use of the Brown and LOB Corpora on the ICAME CD-ROM made available by Norwegian Computing Centre for the Humanities, Bergen, Norway.

c．状態・位置変化使役：CAUSE [BECOME [y BE AT z]]

(2a) は Vendler の状態動詞を，(2b) は到達動詞を，(2c) は達成動詞を各々カバーしている。

しかし，(2)では Vendler の活動動詞が含まれていない。活動動詞の意味構造がどのようなものかという問題は，筆者だけでなく Dowty や Van Valin でも未解決に残されている。Foley & Van Valin (1984：52) は活動動詞に共通の意味概念を設定できないことをはっきり認めている。他方，Dowty (1979) は DO という意味概念を立て，「動作主の直接的なコントロールの下にある (is under the unmediated control of the agent: p. 118) と規定している。Dowty は，DO は必ずしも意図性を表すのではない (p.118) と述べているものの，動作主 (agent) という用語を持ち出しているところから判断すると，やはり DO に意図性を含めているようにも取れる。しかしながら，意図性は必ずしも活動動詞全体を特徴づける要素ではない。意図的な行為でも瞬時に終わるものもあるし，また，意図的でなくても継続的な活動と呼べるものもある（例えば It rained for many days.)。従って，意図性は活動動詞の意味とは切り離して考えることが必要である。以下では，活動動詞に共通の意味概念がどのようなものかを検討することにしよう。

2．ACT と ACT-ON

我々は，DO は意図性を表すものとし，それとは独立の概念として，活動動詞に共通する意味特徴として ACT という概念を提示したい。ACT は継続アスペクトを表す抽象的な概念であり，必ずしも人間が意図的に行動 (act) することを意味するわけではない。継続アスペクトは明確な完了点を含意しない点で状態アスペクトと似ているが，純粋な状態が開始点や終了点を示せないのに対して，継続活動は開始 (begin to do) や終了 (stop doing) を表すことが可能である。

ACT という記号は Pinker (1989：193) からの借用であるが，Pinker が

「ACT の主語は動作主ないし行為者」としているのに対して，我々は前述のように継続的活動というアスペクト特性を重視している。Pinker と同じように，我々も ACT は自動詞（一項述語）にも他動詞（二項述語）にも使えるものとし，二項述語の場合は ACT-ON として表す。

(3)　a．非能格自動詞　　b．接触・打撃動詞

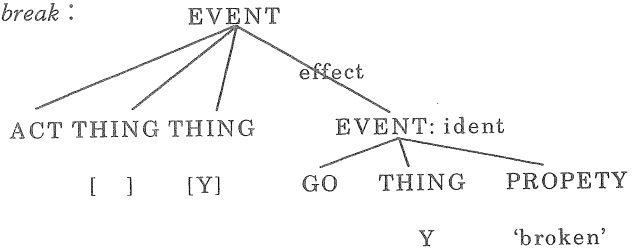
(*work, quarrel, talk, rain, shine*)

(*touch, hit, kiss, slap, kick, push, seize*)

一項述語としての ACT に該当するのは work, talk, quarrel などの非能格自動詞であるが，ここには rain, shine なども含まれるものと考える。他方，二項述語としての ACT-ON については Pinker と小論では幾分考え方が異なる。

Pinker (1989：198) は x ACT-ON y の x は動作主，y は被動作者 (Patient) を表すと考え，例えば他動詞の break の意味構造を(4)のように想定している。

(4)　*break*：



ここでは，ACT の目的語としてY（壊される対象）が据えられているので，Y は 'Patient' の解釈が与えられる，とされる。実際，Pinker (p.194) は，意味構造と統語機能の結び付け (linking) において，ACT の主語は外項，その目的語は内項に対応すると述べている。しかしながら，これでは，次に述べる状態変化動詞 (break, kill) と接触・打撃動詞 (hit, kick) との違いが見過ごされてしまう。そこで我々は，上掲 (3b) で示したように，他動詞としての ACT-ON は接触や打撃の働きかけだけに限定することにする。打撃・接触の動詞は，その結果どうなるという状態変化を含意せずに力の行使だけを意味するか

ら，いつまでも継続することができる。

このように ACT-ON を用いると，概念構造は次のような結び付け規則によって統語構造に投射されることになる。

(5) 状態変化

[x ACT] CAUSE [BECOME [y BE AT-z]]
↓ ↓
外項 内項

接触・打撃

[x ACT-ON y]
↓ ↓
外項 内項

結び付け規則

Ⅰ．外項規則：ACT の主語が外項になる。

Ⅱ．内項規則：状態（変化）がある場合は BE の主語が内項になり，そうでない場合は ACT-ON の対象が内項になる。

要するに，主語は概念構造の左側から，目的語は右側から順に選ばれるということになる。

本稿で提案する(3)の意味構造は，2つの特徴を持っている。1つは，継続活動を表す意味要素として設定された ACT という概念が一項述語（3a）としても二項述語（3b）としても機能するという点である。一項述語として機能する場合には work, talk, dance などの非能格自動詞に対応し，他方，二項述語としての用法では接触・打撃の他動詞に対応する。従って，非能格自動詞と接触・打撃他動詞は ACT という意味概念を共有することになる。これら2種類の動詞が実際に共通の意味特性を備えていることは，第4節で具体的に論証することにする。(3)の意味構造で注意すべきもう1つの点は，他動詞的な用法では直接目的語に当たる要素（x ACT-ON y の y）が作用対象を表す前置詞概念 ON の目的語として，一種の場所的な表現として捉えられていることである。次節では，まずこの点を明らかにしておこう。

3．作用対象の場所性

Fillmore（1970）は，他動詞の中でも hit, slap, strike, kick などが break, bend, shatter, split などと統語的に異なる振舞いをすることを指摘した。

(6) a. I hit/slapped/struck/kicked Bill's leg.

a′. I hit/slapped/struck/kicked Bill in the leg.

b. I broke/bruised/bent/shattered Bill's leg.

b′. *I broke/bruised/bent/shattered Bill in the leg.

(6a) は Bill の足に対する単なる働きかけであるのに対し，(6a′) は足への働きかけの結果，所有者である Bill が何らかの影響を受けたことを意味する（従って，Bill が死体のときは（a′）の構文が成り立たない：Wierzbicka 1976）。他方，break, kill などの状態変化他動詞（CAUSE [BECOME [y BE broken]]）は元々，目的語に対する影響（つまり状態変化）を意味する動詞である。とりわけ，その直接目的語は状態述語 BE の項であるから，打撃動詞の目的語とは異なり，場所的表現とは見なせない。従って，(6b) の break, bruise などでは Bill だけを取り立てて（b′）のように表現することができない。(6a′) がどのような概念構造を持つのかは定かではないが（Massam (1989), Jackendoff (1990 : 111) を参照），ACT-ON と CAUSE BECOME の違いが根本的な意味タイプの違いとしてあることは間違いない。

状態変化他動詞と接触・打撃他動詞の違いを示すもう1つの構文に動能構文（conative construction）がある。これは，kick him に対応する kick at him のように，他動詞を自動詞的に用いる構文である。Guerssel et al.（1985）や Pinker（1989）で観察されているように，動能構文が成り立つのは，他動詞の中でも急激な動きを伴う接触・打撃を意味する hit, cut などであり，状態変化を含意する break や kill には成立しない。

(7) a. Paula hit the fence.

a′. Paula hit at the fence.

b. Margaret cut the bread.

b′. Margaret cut at the bread.

c. Janet broke the bread.

c′. *Janet broke at the bread. —— Levin (1993 : 41)

hit the fence が実際にフェンスを叩いたのに対して，hit at the fence は叩こうとしたことを意味する。このことから，Pinker（1989：104）は“X acts on Y”を“X goes toward Y acting on Y”に変換するような語彙規則を想定している。しかし，X hit at Y. ではまだYに対する働きかけ（ACT-ON）が実現されていないのだから，Pinker の示唆する意味構造“X goes toward Y acting on Y”は動能構文の意味を正しく表示していないことになる。

我々の表記法では，接触・打撃は ACT-ON で表され，通常は ACT-ON 全体が１つの他動詞（kick, kiss, slap など）として語彙化される。

(8) x $\underbrace{\text{ACT-ON}}_{hit}$ y

hit が単に ACT だけでなく，ON という前置詞的な要素を意味的に含んでいるというのは，例えば enter が GO INTO, reach が GO TO を表す（Gruber 1976，影山1980）のと同じことである。このように ON が動詞 hit の意味の一部分であると考えると，接触・打撃の対象（y）は統語的には直接目的語として具現されることになり，その結果，対象が実際に接触・打撃の作用を被っていることが含意される。接触・打撃の動詞では，このように ON を語彙的に編入（lexically incorporate）するのが無標の状況だとすると，ON を独立した形態でわざわざ明示することによって特別な意味合いが生じることは容易に想像できる。つまり，動能構文の at は ON を具現したものだと考えると，ON を編入した無標の状態が実際の接触を表すのに対して，ON を明示する有標の動能構文は未だ接触していないことを表すことになる。その結果，この特別の構文では at が方向性を意味するということになる。この考え方によれば，touch のように動きよりむしろ接触を強く含意する動詞は強制的に ON を動詞の意味の一部として取り込むために，動能構文（*touch at the rabbit）にはならず，逆

に，look at や listen to のような物理的接触のない動詞は ON を語彙的に取り込むことができない（*look/listen me）ことが，うまく説明できる。

なお，このように前置詞概念 ON を明示するかしないかによって文全体の含意が異なることは，動能構文に限られず，例えば Jane walked along the street. 対 Jane walked the street. や The needle pierced through the cushion. 対 The needle pierced the cushion. などの組にも広く一般的に観察される。これらの組において，前置詞を明示しない構文（つまり前置詞概念を動詞そのものの意味に取り込み，場所を目的語扱いにする構文）は対象が全体的な影響を受けることを意味している（Anderson 1971）。

ここで「対象への影響」ということの意味を明確にしておく必要がある。生成文法での議論の中では影響（affectedness）という概念がしばしば使われているが，この用語は極めて曖昧である。直感的なレヴェルでは，The man killed the cat. の目的語も The man kicked the cat. の目的語も主語の行為によって何らかの影響を被っているから，affected と見なすことができるし，実際，多くの場合，両文とも目的語（the cat）は被動者（Patient）と呼ばれる。しかしながら，kill と kick では上述のような違いがあるから，その目的語を同等に扱うことは適切でない。我々は，影響といった曖昧な用語は廃し，状態変化の有無によって対象を区別することにする。つまり，ACT-ON の目的語は接触・打撃の及ぶ作用対象に過ぎず，状態変化の対象（Theme）ではない。状態変化の対象はあくまで状態述語（BE）の主語として規定される。

この違いは，日本語では「てある」構文にはっきりと現れてくる。

(9) <u>状態変化</u>

鍵が開けてある。

洗濯物が乾かしてある。

夕食が作ってある。

寿司がにぎってある。（Matsumoto 1990）

<u>接触・打撃</u>

*お父さんの肩がたたいてある。

*ボクシングの相手がなぐってある。

*石が握ってある。

「握る」という動詞は「相手の手を握る」というときと，「寿司をにぎる」というときでは意味が異なる。前者は接触動詞であるが，後者は状態変化動詞である。「*相手の手が握ってある」と言えないが，「寿司がにぎってある」と言うのは可能である（Matsumoto 1990）。

以上のように，同じ他動詞であっても，状態変化を表すものと接触・打撃を表すものとは概念構造が異なる。状態変化他動詞については生成意味論以来，CAUSE [BECOME [BE]] という使役構造がほぼ一般的に認められているが，他方，接触・打撃の他動詞についてはこれまで具体的な意味構造の提案がない。我々は，接触・打撃の他動詞は，継続アスペクトを有するという点で，work などの非能格自動詞と同等に扱うわけであるが，次節では，これら2種類の動詞が実際に同じ意味概念（ACT）を共有することを論証していく。

4．ACT の継続アスペクト

非能格自動詞と接触・打撃他動詞に共通する継続活動（ACT）の存在を示すと思われる言語現象を探ってみよう。

4.1. hard

hard という副詞は英和辞典では「懸命に，精出して」のような日本語訳を与えられているが，これは正確ではない。次の日英語を比較してみよう。

(10) a．少年は一生懸命に勉強した。

The boy studied hard.

b．少年は一生懸命に英単語を暗記した。

*The boy learned the English words hard.

日本語の「一生懸命に」が主語の意図的な努力を描写し，「勉強する」にも「暗記する」にも使えるのに対して，英語の hard は study と learn で違いを見せる。小西ほか（編）『プログレッシヴ英和中辞典』の learn の項では「study が

積極的努力を伴うのに対して，learn は練習とか授業によって学ぶ受身的な過程を表す。したがって *I am learning very hard. のように積極的努力を表す副詞とともに用いない」という説明がなされている。しかし learn を memorize に取り替えても結果は同じだろう。memorize はかなりの努力を必要とするから，「受身的な過程」という意味は重要でないと判断される。むしろ重要なのは，learn や memorize が「知識を獲得する」という結果を含意することである（I have studied English for eight years, but I can't speak it yet. に対して，*I have learned English, but I can't speak it. は意味的に矛盾する）。実際，hard を状態変化の他動詞と一緒に使うことは普通できない。

(11) *They broke the door hard.（懸命に扉を壊した）

*She killed the cockroach very hard.

もちろん，hard は状態変化の自動詞や非対格自動詞とも相容れない。

(12) *The window broke hard.

*Many earthquakes occurred hard.

以上では，hard という副詞が状態変化ないし完了アスペクトを意味する動詞とは共起しないことを見た。この観察からすると，hard は未完了アスペクトの動詞を要求すると思われるかも知れない。しかしながら，たとえ未完了であっても，状態動詞は hard と整合しないことに注意しなければならない。

(13) *I know Spanish hard.

*Sue likes comics hard.

*Johnny resembles his father hard.

従って，Vendler 分類で言うなら，到達動詞，達成動詞，および状態動詞は hard で描写できないということになる。残るのは活動動詞であるが，ここには非能格自動詞だけでなく，我々の言う接触・打撃他動詞も含まれる。これらは ACT という継続活動の意味を共有し，その性質が hard と調和するものと思われる。（もちろん，働きかけの弱い touch などは意味的に除外される。）このことは，コーパスから任意に抽出した hard の用例からも裏付けることができる。

⑭ ACT（非能格自動詞）

a. They worked hard for the rest of the morning. (LOB : P10 174)
she tried hard to whistle to it (*Alice's Adventures*)
she had fought so hard (Andre Dubus "The Fat Girl")
She had to think hard (Gail Godwin "Dream Children")
Charlie was listening hard (LOB : P18 81)
Don't you play hard today then. (Brown : N27 0600)

b. he might be shivering too hard to answer in a man's voice. (David Quammen "Walking Out")
[The type] was trembling too hard to be deciphered. (John Updike "The Christian Roommates")
she laughed so hard she couldn't stop. (Brown : P02 0530)
to sleep as hard as possible (LOB : F47 0740 7)

c. it was raining hard. (LOB : L21 183)
The wind was blowing hard (Tobias Wolff "The Liar")
It was snowing hard (Brown : N26 1200)

⑭では，aグループのような意図的な行為を表す，典型的な非能格動詞だけでなく，bグループのような，いわゆる経験者（Experiencer）を主語に取る動詞，あるいはcグループのような天候などの自然活動を表す動詞も含まれることに注意しておきたい。rain, snow, blow などの例は，hard の主語が意図的な動作主に限られないことを如実に示している。

⑮ ACT-ON （接触・打撃動詞）

Alice's elbow was pressed hard against it [i.e. the door] (*Alice's Adventures*)
He slammed the window so hard I thought the glass would fly out (James Baldwin "Sonny's Blues")
I hit him as hard as I can in the face. (Stanley Elkin "A Poetics for Bullies")

she kissed me hard (Richard Ford "Rock Springs")

John Wesley kicked the back of the seat so hard (Flannery O'Connor "A Good Man Is Hard to Find")

She threw the rock hard and hit the bear in the stomach. (Tobias Wolff "The Liar")

the victim could chew hard on a piece of paper (Brown : F26 0700 5)

I smacked him hard across the face. (Brown : N18 1540)

He gripped the wheel hard to fight the despondency of defeat. (Brown : N20 1490)

he repeated with great emphasis, looking hard at Mice (*Alice's Adventures*)

Nigel stared hard at him (LOB : P13 209)

⒂のグループは「ぶつ，蹴る，キスする，握る」などを意味する動詞が典型的であるが，最後の2例の look, stare や listen などもここに含めておく。これらは「視覚的ないし聴覚的注意を相手に注ぐ」という意味であるから，抽象的な接触ないし打撃と見なせる。

このように，hard との共起可能性は継続活動を表す非能格自動詞と接触・打撃他動詞との共通性を裏付ける証拠と考えてよいだろう。

4.2. 軽動詞構文

ACT と ACT-ON に共通する現象としてもう1つ，take a walk, give NP a kick のような軽動詞構文（light verb construction）が考えられる。この構文は，take, have, give, make という意味の軽い動詞（light verb）を本動詞とし，その目的語には動詞をそのまま名詞に転換した動作名詞を取る。概念的意味に限ると，I had a cry. は I cried. と，I gave it a try. は I tried it. と言い換えることができるが，当然，両者の間には Wierzbicka（1982）や Dixon（1991）などが指摘する様々な意味的・語用論的相違が観察される。

英語の軽動詞構文について未解決の問題で最も重要なのは，どのような場合に give が用いられ，どのような場合に have が用いられるか，といった軽動詞の選択条件である。これまでこの構文は，Dixon, Wierzbicka の他にも Live (1973) や Cattell (1984) など多数の研究で取り上げられているものの，ほとんどの場合は動作名詞と軽動詞の結び付き方は予測のつかない「イディオム」として片づけられてきた。ところが，ACT などの概念構造のスキーマを用いれば，軽動詞の選択がおおよそ予測可能になる。つまり，動作名詞の元になる動詞の概念構造のタイプによって，軽動詞の選択が決定されるように思える。

まず，have についてまとめてみよう。have a V という構文は専らイギリスおよびオーストラリアの英語で用いられるようであるから，ここでのデータは Wierzbicka (1982) と Dixon (1991 : Ch. 11) に依っている。これらの研究によれば，イギリス英語で(16)は適切だが(17)は不適切である（アメリカ英語では have の代わりに take を用いるが，take a V の範囲はイギリス英語の have a V ほど広くなく，(17)でも take a V が成り立たない場合が多い)。

(16) a. have a laugh/smile/cry, have a walk (in the garden), have a swim (in the river), have a sit-down (on the sofa), have a listen, have a look (at the baby), have a think (about the solution), have a talk/chat (with Mary)

b. have a bite/smell/taste/lick (of the cake), have a ride of your bike, have a punch of the punchball, have a stroke of the fur coat, have a throw of his boomerang, have a kick of his football

(17) a. *have an arrive at the gate, *have a cross over the bridge

b. *have a see of the baby, *have a know of the solution

c. *have a wash of one's hands, *have a kill of the chickens, *have a break of the window, *have a build of a new house, *have a torture of the prisoners

Wierzbicka と Dixon が挙げているこれらの例を概念構造の観点から見つめ直してみよう。

⒃ですぐに気づくのは，（16a）が自動詞 ACT に，（16b）が他動詞 ACT-ON に対応することである。これに対する⒄は移動（a），状態（b），状態変化使役（c）という3つのグループに分かれるが，（a）と（c）は完了アスペクト（BECOME）を含む点で共通し，また，（b）は状態述語（BE）を含んでいる。従って，これらは，BECOME [BE] という概念構造の鋳型に該当する。そこで，have a V が成立する動詞と成立しない動詞を整理すると，次のようにまとめられる。

・have a V が可能：継続活動の動詞（ACT および ACT-ON）

・have a V が不可能：状態（BE）および状態変化・位置変化（BECOME [BE]）

ここで重要なのは，have a V の適否が純粋にアスペクトの観点からだけでは十分に説明しきれないという点である。継続活動の動詞が未完了（atelic）のアスペクトを持ち，他方，状態変化・位置変化の動詞が完了相（telic）を持つということだけから見れば，have a V は未完了の出来事を描写すると言えそうに思える。この推測は，次のような移動動詞における違い（Dixon 1991）から裏付けられる。

⒅ a. He had a walk in the garden. She had a swim in the pool.

b. *He had a walk to his office. *She had a swim across the river.

（18a）は継続活動として散歩ないし水泳を楽しんでいることを表すが，（18b）は職場あるいは川の向こう岸にたどり着いた時点でその行為が完了する。このように have a V 構文が未完了の出来事を描写するのは，have という動詞そのものが未完了アスペクトを持つことと相関していると考えられる。

しかしながら未完了相を持つということだけでは，（17b）の状態動詞が説明できない。状態動詞が have a V 構文に適合しない理由は，have よりむしろ a V という不定冠詞表現に求めることができる。この不定冠詞は，本来は未完了である継続活動（V）に時間的な区切り（boundedness）を与えるという役割を果たしている。同じことは，「泳ぐ」に対する「ひと泳ぎする」のような日本語表現にも観察され，この「ひと」は継続的活動を1つの時間的なまとまりと

して取り出している。活動動詞（ACT）の継続性はこのように特定の統語的形式を加えることによって，限定性に変化することができるが，他方，see や know のような状態動詞が持つ永続性は時間的に限定できないのが普通である。そのため，状態動詞は have a V 構文から排除されることになる。

have a V が ACT と ACT-ON の両方に適用するのに対して，give NP a V は ACT-ON だけに限られるようである。give NP a V 構文に現れる動作名詞を整理してみよう。

(19) a．たたく，つつく，蹴る，刺す

give NP a blow/a crack/a kick/a nudge/a pat/a peck/a poke/a punch/a slap/a smash/a stab/a tap/a yank

b．押す，引っ張る

give NP a bump/a jerk/a pull/a tug/a press/a push

c．さする，なでる，こする，なめる，拭く

give NP a lick/a rub/a shine/a stroke/a sweep/a touch/a wipe/a wring/a kiss

d．抱く，振る，握る

give NP a cuddle/an embrace/a hug/a shake/a shuffle/a squeeze/a stir/a touch/a twist

e．投げる，はじく

give NP a fling/a flip

f．叱る

give NP a rebuke/a reprimand

g．動作で合図する

give NP a smile/a frown/a look/a stare/a wink

（a）～（g）の意味分類から明らかなように，give NP a V 構文のベースとなる動詞は接触・打撃を意味するものばかりである。他方，break, make, build, kill のように，明らかに状態変化を意味する動詞はこの構文に適合しない。

(20) a. *He gave the window a break.

b. *She gave a toy a make.

c. *He gave the cockroach a kill.

これに関連して，次に示す Dixon の観察が興味深い。

(21) a. He smashed it (*a little bit).

a′. *He gave it a smash.

b. He tore it a little bit.

b′. He gave it a little tear.

Dixon (1991：357) は smash と tear の対比を指摘し，smash は a little bit と共起しないのに，tear はそれができると言う。しかし更に重要なのは，smash が完全な状態変化動詞であるから *smash at NP という動能構文に使えないのに対して，tear は「破るために引っ張る」という接触動詞としての意味があり，この場合は tear at NP が成り立つ。言うまでもなく，at NP が成り立つのは状態変化ではなく接触の動詞である。

ここで重要なのは，統語的な他動詞性と ACT-ON とが必ずしも一致しないということである。(19)に挙げた例はほとんどが他動詞に対応するのだが，「合図を送る」というグループ (g) では，smile at NP, wink at NP, look at NP, stare at NP, frown on NP のように自動詞に対応している。これらも，概念構造では ACT-ON に該当すると考えると，軽動詞の選択は構文上の他動詞・自動詞の区別ではなく，ACT-ON という意味的な概念によって決定されていることが明らかになる。

本稿では，これまで明確な定式化がなかった活動動詞の意味構造について ACT (非能格自動詞) および ACT-ON (接触・打撃動詞) という概念を提示した。ACT の本質は継続アスペクトであり，これは BECOME の完了相とも BE の状態性とも対立する概念として捉えることができる。なお，継続活動を表す動詞が，He pushed the door open. や She talked herself hoarse. といった様々な結果構文に展開することについては，影山 (1993a, 1994a, 1995) などを参照されたい。

引用文献

Anderson, S. R. (1971) "On the Role of Deep Structure in Semantic Interpretation," *Foundations of Language* 7, 387-396.

Cattell, Ray (1984) *Composite Predicates in English (=Syntax and Semantics 17)*. Academic Press Australia.

Dixon, R. M. W. (1991) *A New Approach to English Grammar, on Semantic Principles*. Oxford University Press.

Dowty, David (1979) *Word Meaning and Montague Grammar*. Reidel.

Fillmore, Charles (1970) "The Grammar of Hitting and Breaking," in R. Jacobs and P. Rosenbaum (eds.) *Readings in English Transformational Grammar*, 120-133. Ginn.

Foley, William and Robert Van Valin, Jr. (1984) *Functional Syntax and Universal Grammar*. Cambridge University Press.

Gruber Jeffrey (1976) *Lexical Structures in Syntax and Semantics*. North-Holland.

Guerssel, M., K. Hale, M. Laughren, B. Levin, and J. W. Eagle (1985) "A Cross-linguistic Study of Transitivity Alternations," *Papers from the Parasession on Causatives and Agentivity, CLS 21 : Part 2*, 48-63.

Jackendoff, Ray (1990) *Semantic Structures*. MIT Press.

影山太郎（1980）『日英比較　語彙の構造』松柏社.

影山太郎（1993a）『文法と語形成』ひつじ書房.

影山太郎（1993b）「完了形容詞と語彙概念構造」『人文論究』43：2，110-125．関西学院大学.

影山太郎（1994a）「語彙概念構造と結果表現」『英語青年』140：14，188-190 & 204.

影山太郎（1994b）「能格動詞と非対格動詞」『英米文学』39：1（英文学科創設60周年記念論文集），405-421．関西学院大学英米文学会.

影山太郎（1994c）「英語自動詞の意味論」『関西学院大学文学部60周年記念論文集』169-184．関西学院大学.

影山太郎（1995）「概念構造の合成と one's way 構文」『英米文学』40：1，179-202．関西学院大学英米文学会.

小西友七ほか（編）（1980）『プログレッシヴ英和中辞典』小学館.

Levin, Beth (1993) *English Verb Classes and Alternations*. University of Chicago Press.

Live, Anna H. (1973) "The *Take-Have* Phrasal in English," *Linguistics* 95, 31-50.

Massam, Diane (1989) "Part/Whole Constructions in English," *WCCFL* 8, 236–246.

Matsumoto, Yo (1990) "Constraints on the 'Intransitivizing' Resultative *–te aru* Construction in Japanese," in H. Hoji (ed.) *Japanese/Korean Linguistics*, 269–283. CSLI, Stanford University.

Pinker, Steven (1989) *Learnability and Cognition*. MIT Press.

Van Valin, Jr., Robert (1990) "Semantic Parameters of Split Intransitivity," *Language* 66, 221–260.

Vendler, Zeno (1967) *Linguistics in Philosophy*. Cornell University Press.

Wierzbicka, Anna (1976) "Mind and Body from a Semantic Point of View," in J. McCawley (ed.) *Syntax and Semantics 7*, 129–157. Academic Press.

Wierzbicka, Anna (1982) "Why Can You *Have a Drink* When You Can't *Have an Eat*?" *Language* 58, 753–799.

— 文学部教授 —